

# 第1章 昭和54年度京都大学構内遺跡調査の大要と成果

樋口隆康 亀井節夫  
泉 拓良 岡田保良

## 1 調査の大要

京都大学では、構内のすべての掘削を伴う工事の計画を、計画段階で埋蔵文化財研究センターへ提出することとしている。工事地点や掘削の深さによって、予定地の変更を要請するもの、試掘調査をおこなって遺跡の存在や遺存状況をまず調べるもの、過去の資料や試掘調査の結果から発掘調査を行うもの、立合調査を行うものに分ける。

この方針に従って、昭和54年度に行った京都大学構内の埋蔵文化財関係各種の調査は、以下の24件である。立合調査は、実施済みのもののみを記した。

試掘調査	北白川合宿研修所新営予定地（北部構内BH37区）	（第4章，図版1-66a～j）
	医学部総合解剖センター新営予定地（医学部構内AP19区）	（第4章，図版1-67a～h）
	医学部構内電気管理設予定地（医学部構内AL18区）	（第4章，図版1-68a～c）
	教養部構内電気管理設予定地（教養部構内AM24区）	（第4章，図版1-69a・b）
	工学部機械系校舎新営予定地（本部構内AT29区）	（第4章，図版1-70a～g）
	人文科学研究所分館資料収蔵庫等新営予定地（北白川小倉町）	（第1章）
	理学部附属瀬戸臨海実験所研究棟等新営予定地（和歌山県白浜町）	（第5章）
	工学部建築系校舎新営予定地（本部構内AZ30区）	（第1章，図版1-71a～d）
	病院東構内和進会館移転予定地（病院東構内AK18区）	（実施予定，図版1-72a～f）
	教養部構内吉田食堂新営予定地（教養部構内AP22区）	（実施予定，図版1-73a～f）
発掘調査	医学部総合解剖センター新営予定地（医学部構内AP19区）	（整理中，図版1-74）
	本部構内実験排水槽新営予定地（本部構内AT27区）	（実施予定，図版1-75）
立合調査	教育学部校舎新営工事（本部構内AW22区）	（図版1-76）
	医学部構内電気管理設工事（医学部構内）	（第1章，図版1-77）
	教養部構内電気管理設工事（教養部構内AM24区）	（第1章，図版1-78）
	農学部旧校舎解体工事（北部構内BD32区）	（図版1-79）
	農学部農芸化学学科硝子温室改築工事（北部構内BF30区）	（図版1-80）
	医学部構内給水管理設工事（医学部構内）	（第1章，図版1-81）
	医学部構内ガス管理設工事（医学部構内）	（第1章，図版1-82）
分布調査	理学部附属花山天文台（京都市山科区北花山大峰）	
資料整理	理学部物理学科校舎新営予定地の発掘調査	（第2章，図版1-56）
	工学部イオン工学実験施設新営予定地の発掘調査	（第3章，図版1-57）
	医学部構内電気管理設工事の立合調査	（第1章，図版1-64）
	北部構内給水管理設工事の立合調査	（第1章，図版1-65）

なお、人文科学研究所分館資料収蔵庫等新営予定地の試掘調査は、人文科学研究所考古学研究室(林巴奈夫教授)に依頼し、また工学部建築系校舎新営予定地の試掘調査は、工学部建築学第二教室地域生活空間計画研究室(西川幸治教授)に依頼した。そのほかの試掘調査、発掘調査、資料整理は京都大学構内遺跡調査会に委託し、その報告をもとに本年報の第1部を作成した。ただし、理学部物理学科校舎新営予定地の発掘調査(第2章)は、別冊で報告する予定であるので、概要を報告するにとどめた。また、工学部イオン工学実験施設新営予定地の発掘調査(第3章)についても、昭和55年度に第2次調査を行う予定であるので、正式な報告を後日刊行する。

## 2 構内座標の転換

京都大学構内遺跡の調査では、昭和51年度以降、構内全域を50m方眼で地区割し、かつ互いにはなれた地点の位置関係を正確に把握するため、構内座標に基づく網目を設定するとともに、各調査ごとには、精確な座標値と方向角を測定した基点を設置し、すべての遺構、層位の実測を構内座標の経緯線を基準にして行っている〔京大埋文研78a p.2〕。このとき、構内座標では、京都市都市計画局発行2500分の1市街図「吉田」の西北角を点(X=2000, Y=2000)とした。この点は国土調査法第6座標系<sup>(1)</sup>による点(x=-108000, y=-20000)<sup>(2)</sup>にあたる。また、構内座標軸は国土座標系のx軸を基準方向としたものになっている。

一方京都市では昭和52・53年度にわたって、合計71ヶ所の四等三角点設置事業を行い、京都市内主要部における発掘調査の地点標示のすべてを、共通の国土座標系で表わすことを可能にした〔京都市文化観光局文化財保護課79〕。京都大学構内にも、屋上点(10)および地上点(10-1)が病院東構内に設けられた。前記三角点の成果表によれば、座標値はそれぞれ次のとおりで、経緯度も表示されている。

$$(10) \begin{cases} x = -109105.33 \\ y = -20042.36 \end{cases} \quad (10-1) \begin{cases} x = -109141.53 \\ y = -19972.08 \end{cases}$$

ところで、昭和51年度以降に京都大学が遺跡調査に用いてきた構内座標系では、一応

$$x = X - 110000, \quad y = Y - 22000$$

によって国土座標を導くことができるし、実際にそのようにして地図上に作図し、構内の地区割を国土座標系に組みこむ配慮をしている〔本年報図版1〕。しかし、元来、構内座標系の局地原点の設定に関して、それが既存の三角点でも、そうした点から正確に測量された点でもなかった。大学構内に限ってみれば校舎や遺跡相互の位置関係さえ正確であれ

ば、局地原点が国土座標系の点としてどれほどの誤差をもつかということは、あまり重視されなかったといつてよい。

他方、京都市域における数々の発掘調査において、その大半が、歴史的な計画都市である平安京の解明を主眼としているにもかかわらず、各調査が共有する測量基準点としては、国土地理院所管のごく限られた三角点を用いる以外になく、せいぜい2500分の1市街図に調査地点を落しこむことで遺跡相互の関係を求めるというのが実状であった。こうした中で、京都市が遺跡調査用の三角点網を市全域にめぐらせたことは、平安京および周辺遺跡研究の今後の展開の上で画期的な事業であったといえる。京都大学構内遺跡についても、白河の条坊的市街が及んだ地域として、平安京の市街地構成と密接な関係にあり、また鴨東の条里形成や地形の変遷を究明する上でも、国土座標系を市全域と共有することの意義は大きい。

そうした観点から、当センターでもできるだけ早い機会に、市の基準点測量標とその測量成果を利用して、従来の構内座標系を、真の国土座標系に基づく局地座標系に転換することを計画し、昭和53年度から54年度にかけて、構内遺跡調査会が主体となって作業を実施した。その座標転換の内容は次のとおりである。

- (1) 京都市遺跡発掘調査基準点(10：京大病院第1病棟屋上)および(4：京都市養正住宅屋上)を使用して、新たに本部構内法経図書館屋上に四等三角点(10-2)を設ける。

$$(10-2) \begin{cases} x = -108257.726 \\ y = -19767.454 \end{cases}$$

- (2) 構内全域に組まれた1次から3次までのトラバース網の各測点について、三角点(10)と(10-2)を基準にして再測する。
- (3) 構内全体で都合26ヶ所の遺跡調査用基準点すべてについて、国土座標第6座標系に則って新たに補正された座標値および真北からの方向角を計測する。

この結果、構内遺跡調査用基点の旧座標値の補正值( $\Delta X$ ,  $\Delta Y$ )を明らかにすることができた。たとえば、本年報第2章で報告のあるBG31区の調査のために設けられた3ヶ所の基点について、旧座標系では新座標系の値に対してX軸方向で北へ約3.0m、Y軸方向では東へ約3.3mずれていることがわかった。こうした誤差の値は、構内全体で一様ではなく、X軸方向の補正值 $\Delta X$ はY座標の、Y軸方向の補正值 $\Delta Y$ はX座標のそれぞれ一次関数で有効に近似しうることがわかっている。その関数における勾配は、旧座標系が、真の国土座標第6座標軸に対して与えられていた回転の大きさである。その一次関数は、旧

値よりも大きいとき、 $\Delta X$ 、 $\Delta Y$ ともに正とすれば、次の式となる。

$$\Delta X = -2.306 \times 10^{-3} Y + 8.848 \quad \Delta Y = 2.630 \times 10^{-3} X - 2.605$$

上記2式の勾配から、旧構内座標系は、国土座標系のx軸に対して、X軸を $0^{\circ}07'56''$ 、Y軸を $0^{\circ}09'02''$ だけ反時計回りの方向に回転したものであったことが知られる。したがって、BG31区の場合でも、3ヶ所の基点それぞれに $\Delta X$ 、 $\Delta Y$ の値はわずかず異なるが、図面表記の上では、上記の値すなわち3ヶ所の平均値だけ旧座標系を平行移動し、回転移動は無視して十分に、新座標系への転換が可能となる。

BG31区の場合と同様にして、昭和51年度以降の主要な調査地点の座標の補正値を掲げておく。

調査地区	BE33	AE15・AF14	AH17	AO18	BE29	BG32	AA18
報文掲載年報	51年度	51・52年度	52年度	53年度	53年度	53年度	53年度
$\Delta X$ (m)	2.60	4.92	-4.71	4.44	3.13	2.79	4.56
$\Delta Y$ (m)	3.06	-0.34	-0.01	0.92	2.97	3.36	0.97

なお、この構内座標系においては、X座標の値を一定とする南北方向の直線は、正確には真北方向を示さず、各地点に固有の真北方向角をそなえている。京大病院屋上の三角点(10)において、その値は、X軸に対して時計回りに $0^{\circ}07'34''$ となる。この付近では、東へ1kmずれると20秒余りその方向角は小さくなるはずである。

以上、旧構内座標を新たな真の国土座標系に転換することの意義と理由、実際に転換した結果を記したが、本年報以降、構内座標表示は新座標系によることになったので、それ以前の図面と対照するとき、必ず旧座標の補正を必要とする。

### 3 調査の成果

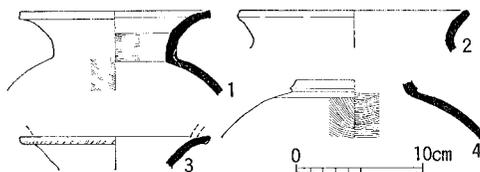
昭和54年度の調査によって、いくつかの新しい知見を得ることができた。その詳細は第2章以下で述べるとし、本節では、それらを各時代ごとに整理して、京都大学構内遺跡の全体像の中で、本年度の成果を明らかにしたい。

**旧石器時代** この時代の遺跡は明らかでないが、北部構内BE33区と医学部構内AP19区から旧石器と思われる剝片や石核がこれまでの調査で出土している。本年度は、石器について考察を試みた(原「京都大学構内出土の旧石器」本年報第6章)。

**縄文時代** 縄文時代の遺跡は、北部構内BF31区を中心とした中期と晩期の京大農学部遺跡、同構内BD35区を中心とした後期の京大植物園遺跡、教養部構内AO24区を中心

とした後期の京大教養部遺跡が確認されていた。これらの遺跡に加えて、本年度新たに、本部構内AT29区に晩期凸帯文土器の包含層があることが判った(第4章5)。一方、北部構内では、BG31区の発掘調査で京大農学部遺跡の北西端を調査し、縄文晩期の人の足跡や小川や埋没林が検出され、当時の集落付近の自然景観と、現在では破壊されてしまった扇状地の自然植生を明らかにできた(第2章)。また、大量に出土した前期～晩期の遺物には編年の基準となる資料もあり、西日本で初めて出土した中期の滑石製垂飾具など貴重なものが多い。同地点の地質断面の観察より、後期以前の高野川系の砂礫層の存在を確認したが、これは高野川の流路と北白川扇状地の変遷を考える上で重要な成果である。以上のほかに、教養部構内AO24区から出土した縄文土器の検討をもとに、北白川上層式土器の研究を行った(泉「北白川上層式土器の細分」本年報第7章)。

**弥生時代** 弥生時代の遺跡は、北部構内BE29区から出土した中期の方形周溝墓、同構内BA30区を中心とした前期の追分地藏遺跡、教養部構内AQ23区を中心とした前期の遺跡が確認されていた。

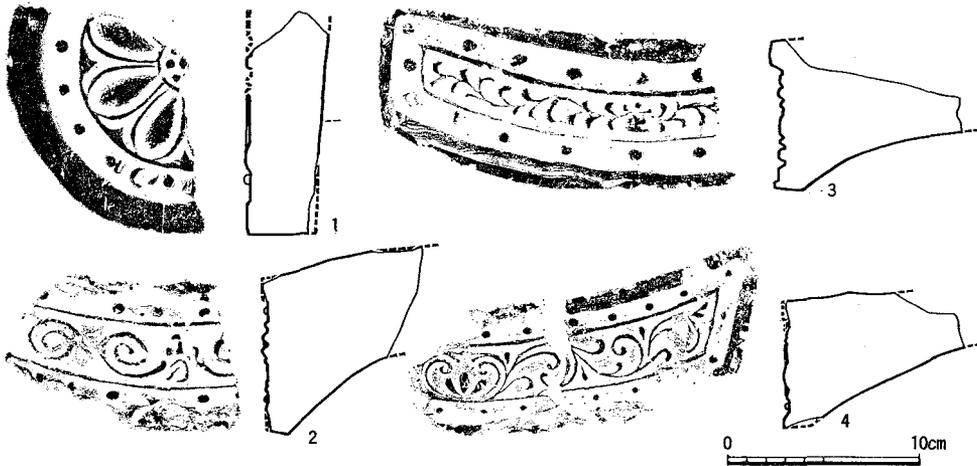


第1図 医学部構内AN19区出土の弥生土器

本年度新たに、本部構内AT29区で前期の包含層を発見した(第4章5)。また、前期や中期の遺跡より一段低い地域である医学部構内AN19区(図版1-64)から、後期の土器が出土している(第1図)。出土した土器は壺がおもであり、胴部が球形に近く張る器形である(1・4)。頸部と胴部の境に低い凸帯が廻る土器(4)や、二重口縁の可能性のある土器(3)からみて、後期の中でも新しい時期に属するものであろう。

**古墳時代と奈良時代** 京都大学構内には、この時代の遺構が少なく、明確なものは北部構内BD33区の方形周溝遺構のみである。本年度この時期の遺物は、医学部構内AP19区から若干出土しただけであり(第4章2)、新たな知見は得られなかった。

**平安時代** この時代は大きく二つに分れ、寺院と葬地を主とし、前期から始まる北部構内と、白河条坊の街区といえる後期を主体にした病院構内とがある[宇野79, 岡田79]。北部構内と病院構内の中間にある教養部構内では、本年度のM24区<sup>118</sup>の試掘調査で前期の包含層を検出し、また、この地点の西約200mの医学部構内AP19区でも前期の土器が出土している(第4章2・3)。したがって、教養部構内とその周辺に新たに遺跡の存在を想定する必要があるであろう。北部構内では、BD32区の立合調査で平安前期と中期の瓦が地表下約1.5mの黄砂層上面からまとまって出土した(第2図2・4)。この地点と隣接した地



第2図 北部構内BD32区出土の軒瓦

点(図版1-9)の発掘調査で、第2図1・3の軒瓦のほか、3と同範の瓦5点をはじめ約10点の軒瓦、「て」字状口縁の土師器皿、延喜通宝などが出土している〔中村73〕。第2図1は『小乃』銘単弁八葉蓮華文軒丸瓦で、『延喜式』所載の小野瓦屋の一本造りによる製品。2は『小乃』銘均整唐草文軒平瓦で小野瓦屋のもの。1と対応する。3は『上』銘均整唐草文軒平瓦で河上瓦窯のものである。4は均整唐草文軒平瓦で、西賀茂東瓦窯の製品であろう。1～4は平安宮の大極殿、豊楽院、内裏、主水司から同範品が出土している〔平安博物館編77〕。4が平安前期、1と2が平安中期、3は中期でも1や2よりやや下るものである。以上のように、BD32区には平安中期を中心とする瓦がまとまって出土していることから、中期頃の寺院がこの付近にあったと推定しうる。また、同じ北部構内のBG31区でも中期を主とする遺物が出土したが、遺構は検出されなかった(第2章)。一方、BH37区では平安後期の土坑が検出され、BG36区の後期の瓦溜と一連のものと考えている(第4章1)。医学部構内では前に述べた前期の遺物のほか、AN19区で後期の井戸と包含層、AP19区で包含層を検出した(第4章2)。またAN19区の西端で、AP19区の地山である黄色粘土層を高野川系の礫層が切っている地点を検出し、医学部構内のほぼ中央にある南北道路の東西で、地山となる層に堆積時期の差があることが判った。

以上のほかに、平安時代の文献史料と、その研究史の検討をもとに、京都大学構内とその周辺を中心とした地域の景観復原の研究を行った(岡田「平安時代鴨東白河の景観復原」本年報第8章)。

**鎌倉時代と室町時代** 京都大学構内全域で、この時代を、寺院や邸宅などがある前半

と、田畑となる後半に分けることができる。田畑化する時期は各遺跡によって異なるが、南北朝の内乱と応仁の乱によって平安時代、鎌倉時代の建造物がほとんど破壊されてしまい、その後田畑になっていくと推定している。前半の遺跡は、鎌倉時代から衰退が始まる北部構内、藤原氏勧修寺家流の邸宅もしくは寺院の遺跡と思われる医学部構内、吉田神社関係の遺跡の教養部構内、白河条坊の街区が残っていた病院構内に分けることができる。北部構内BG31区では、江戸時代の水田耕土の下に、室町時代以後の水田耕作に伴う溝を検出した(第2章)。一方、医学部構内では、この時期が全盛期で、多くの遺構が検出されており〔京大埋文研79〕、本年度もAN19区、AP19区(第4章2)で包含層を確認した。現在整理中のAP19区の発掘調査では、この時期の溝や井戸や土器溜が検出され、室町中期頃までは水田や畑となっていなかったことが判った。本部構内も医学部構内と同様にこの時期の遺構が多くなるのが、本年度の試掘調査で判明した。AT29区で鎌倉時代の溝と土坑を(第4章5)、AZ30区では集石を伴う溝を検出している。AZ30区では瓦器の羽釜と土鍋の完形品が4点出土した。

**江戸時代** 京都大学構内のほぼ全域は田畑であったが、江戸時代の末期に土佐藩邸が北部構内に、尾張藩邸が本部構内に造られている。北部構内では、ほぼ全域が水田と思われ、本年度もBG31区、BH37区とも水田耕土層を確認している(第2章、第4章1)。一方、本部構内では、地形によって水田と畑があったようで、AW28区では南半に水田、北半に畑を確認している(第3章)。医学部構内でも、本年度の調査で、中央の南北道路より東は畑であり(第4章2)、西は一段下って水田であったことが判明した。本年度の調査では、そのような耕作地のほかに、本部構内AW28区で白川道(志賀越道)を検出した。白川道は、平安時代以前に遡るといわれる古道で、今回検出した道路は江戸時代のものである。道路の南側には道路と併行して野壺と小川があり、江戸時代の白川道の風景が偲ばれる。昭和53年度の試掘調査で、江戸時代以前に遡る路面が検出されており〔京大埋文研79〕、今回の調査でもその北端を確認した。この路面と江戸時代の路面の関係については、昭和55年度に行う予定の第2次調査で明らかにしようであろう。

**吉田キャンパス外の附属施設の調査** 京都市左京区北白川東小倉町47番地所在の人文科学研究所分館は、その東約100mに縄文前期～後期の北白川小倉町遺跡があり、研究所内からも縄文土器が出土している〔梅原35〕。研究所の東端に、資料収蔵庫等新営工事が予定されたため、人文科学研究所考古学研究室に遺跡確認の試掘調査を依頼した。調査の結果、北側の試掘坑で中世頃の礫群を検出したが、南側の試掘坑では地表下すぐに幅1m内

外の花崗岩塊を含む黄砂層を検出した。地表下2 mまで調査したが、縄文時代の包含層は検出されなかった。

和歌山県西牟婁郡白浜町字崎の北459番地所在の理学部附属瀬戸臨海実験所構内には、縄文時代を主とする瀬戸遺跡がある。昭和51年度の試掘調査と発掘調査で、実験所東南部に縄文晩期の貝塚と墓地、東北部に古墳と箱式石棺を検出した。本年度は、研究棟を含め3棟の建物が予定されている実験所西部の試掘調査を行った。調査の結果、西北部で縄文晩期の薄い貝塚、西南部で弥生後期～平安時代の製塩土器を包含する層を検出し、縄文時代から平安時代に至る遺跡が、場所をかえながらも、砂州の北端と南端にある微高地上に立地していることが判った(第5章)。

以上のように、京都大学構内には、様々な時代の、多様な性格の遺跡が複合して存在している。それは、大学構内にも幾つかの遺跡のまとまりがあり、そのそれぞれが時代によって変化したことの結果と理解される。平安時代以後について考えてみると、鴨東の地は平安前期には京外であったが、平安後期以後は「京・白川」や「京都」と称される中心地に含まれる。南北朝の内乱や応仁の乱で破壊をうけ、その後の再開発はごく限られた地域にしかみられない。そして、織豊政権が京都を改造するにあたって、御土居のそと、すなわち京都の町に含まれなくなるという経過を辿るのである。京都大学構内で確認される遺跡の変遷もこのような地域の推移の中に位置づけることができる。さらに、他の京外の地域をみると、洛北は、鴨東と同様に平安京外から「京都」に組み入れられた地域であるが、近世には御土居の内になり、鴨東とは異った展開を遂げることが判る。すなわち、京外の地は、平安京一京都のあり方をより鮮明に表現しているといえ、京都大学構内における歴史時代の遺跡調査も、平安京一京都の研究の中に位置づけて進めていくつもりである。

〔注〕

- (1) 全国を13ブロックに分割したうち、近畿地方に適用する座標系で、原点(0, 0)は北緯 $36^{\circ} 00' 00''$ 、東経 $136^{\circ} 00' 00''$ の地点(福井県越前岬付近)にとられている。
- (2) 一般には国土座標系に(X, Y)が用いられるが、すでに京大構内座標を(X, Y)で表わしているため、ここでは国土座標に(x, y)を用いる。